



共通必修科目「地域教育課題と学校・教師」授業風景より

リアルとデジタルが融合する社会の中で

新潟大学大学院教育実践学研究科 研究科長 高木幸子

構内を見渡すと、黄色や赤く彩られた木々がみられるようになりました。歩いていると、足元にある落ち葉を踏んだ柔らかな感触とかさかさという乾いた音と風を感じます。秋から冬に移りつつあることを実感する季節になりました。

学校を取り巻く環境はここ2年ほどで一気にデジタル化が進んでいます。ネットワーク環境下での学習は通常の授業風景となっています。急速に変化する社会情勢を背景に、高度専門職業人の育成を目指す教職大学院では、どのような新たな教育の形が求められているのかを考え、子供にとって望ましい学習の実現や学校改革に資する取り組みができる人材の養成・育成が求められています。

12月に入り、院生の皆さんは子供理解を基盤に基本的な授業実現について考えたり、同僚の協力を得て学校課題の解決に取り組んだり、これまでの自身の取り組み全体を見直して整理したりなど、様々に取り組んでいると思います。

2年間という限られた時間ですが、取り組みを通して理解を深め、それぞれの実りが得られる時を迎えたいものです。

最後に、洪水や大型台風などにより被害を受けた院生や関係の皆様には長く大変な日々が続いていることと拝察し、心よりお見舞い申し上げます。



教職大学院の授業紹介

共通必修

新潟大学教職大学院第5領域の紹介

担当教員 相庭・雲尾・酒井・宮菌

新潟大学教職大学院の第5領域は「地域と学校の関係」「グローバル化と地域社会」「生涯学習と学習計画立案の論理」という大きく3つのエリアで科目群が構成されています。

選択必修科目として「地域の教育課題と学校・教師」「社会のグローバル化と学校・教師の課題」の2科目を選択講義として「生涯学習計画立案における学習支援者の実践的課題」の3科目構成されています。

「地域の教育課題と学校・教師」は3つの視点から講義が構成されています。1つ目が「変化する地域の現実をおさえる」ことです。少子高齢化・グローバル化する地域社会と学校教育の関係性を、現実を踏まえ理解する方法論を探究することです。2つ目が地域社会に存在する教育施設を実際に訪問し、学校と地域の教育施設との連携を探究することです。3つ目が地域と学校の関係と子供たちの学力の関係を考察する視点です。今日「社会に開かれた教育課程」の中身をどのように理解するのかということでもあります。

「社会のグローバル化と学校・教師の課題」では2つの視点から講義が構成されています。1つ目はグローバル社会とはいかなる社会なのかという点を歴史的論理的に探究し、それを授業化するための方法論を探究することです。2つ目はアジアの学校教育がどのように展開されているのかを中国、韓国、

パキスタン、インドなど教育に関わっている方々をゲストに講義を聞いたり、実際の学校にカメラを入れ、実際に見学したりすることを通して、今アジアの教育で何が起きているのかを理解することです。

「生涯学習計画立案における学習支援者の実践的課題」については3つの視点から講義を構成しています。1つ目は「大人を教えること」と「子供を教えること」の相違の理解を図る点。2つ目は「生涯学習」という考え方の理解を深めること。3点目は「学習計画」を立案するための方法論を探究すること。

以上の概要の紹介を簡潔にまとめると、第5領域は学校教育を学校の外部から見つめなおすという点に集約できます。学校は地域社会と共に存在し、地域社会はグローバル化に象徴されるように大きく変化しています。この変化は子供たちの社会観が変化することで、それに適合して学校の在り様が変わることになります。教員も「認識」を広げ「技術」を学ばねばならず、そこに学習計画の必要が生じる。この流れが第5領域の学びの特徴といえます。

ソウル教育大学校大学院生との交流
(2022.11.22)



選択

C芸術・体育系

音楽：担当教員：伊野義博、和田麻友美(附属新潟中教務主任)

図画工作・美術：担当教員：永吉秀司

体育・保健体育：担当教員：大庭昌昭、舘岡信也(附属長岡小教頭)

本講義は、2019年度に新設された「教科教育高度化分野」の選択科目として、隔週金曜日の午後(3限4限)、計8日で開講しています。A人文・社会系、B数理系、C芸術・体育系で、それぞれの教科等の専門性を深めながら、児童・生徒の具体的な姿から授業改善のヒントを探究していきます。

2022年度前期の第1日目は、全ての系合同で授業をスタートしました。教育基本法・学校教育法・学習指導要領等をもとに、各教科の目標や内容がどのような体系となっているのか、グループワークを通して丁寧に再考する機会を持ちました。その後、芸術・体育系では、受講者が日頃抱えている課題をもとに、授業改善に向けての課題(テーマ)を設定しました。

第2日目から4日目は、系の中でも教科に分かれ課題解決に向けて実践(案)の検討を進めました。体育・保健体育のグループ2人のテーマを紹介します。Aさん(中学校保健体育)は、指導と評価がより一体となるような単元計画・授業実践を目指し、「主体的に学習に取り組む態度の評価方法について」、Bさん(小学校体育)は、苦手の児童が少しでも「できたという実感」を得られるような単元計画・授業実践を目指し、「効果的な

ICT機器の活用方法」に着目しました。

第5日目には、各教科で検討した授業計画(案)について、芸術・体育系全体で検討する機会を設けました。何となく理解しあえていたことも、他の教科の方々により分かりやすく説明することは難しさがあります。また、難しいと感じていた課題に対して違った視点から重要なヒントが得られる機会にもなりました。

第6日目から8日目は、実際に作り上げてきた授業計画(案)をもとにした授業実践について、特に児童・生徒の姿を具体的な資料(学習カード、ビデオ映像など)をもとに、できる限り具体的に振り返ることで、成果と課題を検討しました。

教職大学院の中で、教科の専門性に軸足を置いた本授業では、多くの受講者がより実践的に自らの課題に向き合い授業改善を目指しています。芸術・体育系はいわゆる「実技系」の領域となっています。これまで本授業を通して、「体を動かすことで音楽に対する理解が進む」「リズムを通して運動技能を身につける」「個性を重視した対話の重要性に気づける」など、本授業で成果を生み出してきています。

教育フォーラム

にいがた教育フォーラム2022 in August

フォーラムワーキンググループ 田代孝

令和4年8月6日(土)、「ともに考え つくろう 新たな教育の“カタチ” ～不易流行を踏まえた今～」を全体テーマとして「にいがた教育フォーラム2022」が開催されました。

第1部では、「コロナ禍の子ども・学校・地域をふりかえり、教育の未来を探ろう!」として、今井渉氏(新潟県教育委員会義務教育課長)、大森悦子氏(新潟市立小針中学校養護教諭)、渋谷徹氏(新潟市立亀田小学校校長)、平出久美子氏(新潟大学附属長岡小学校教諭)、丸山明生氏(新潟市教育委員会学校支援課長)によるシンポジウムを行いました。

平出氏は、音楽科の授業で環境、学び、人間関係のデザインを見直した実践例を紹介しました。ミニキーボードやキャップをつけたリコーダー演奏、屋外での音楽づくり、ICT機器の活用、地域の伝統音楽の体験、他校との民謡のオンライン交流、目的を明確にした友達との関わり等、視点を変えることでできることがたくさんあること、教師の工夫や考え次第で子どもは変わること、楽しみながら授業づくりをすることを語りました。

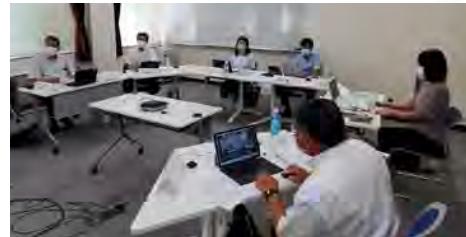
渋谷氏は、自校の3つのミッション「高め合う」「伝える」「挑む」に取り組む中で、GIGAスクール構想で生まれた新たな学びが進んでいることを紹介しました。Zoomを使って授業をしている1年生、委員会の様子から、タブレット端末が児童にとってなくてはならない学びのツールになっていること、未来を創るには「ミュートを外す」ことが大切であり、今、教職員が一丸となって教育活動に取り組んでいることを語りました。

大森氏は、全校生徒によるタブレット端末を用いた毎朝の健康観察、保護者による安心安全メール等を用いた欠席連絡、校内や近隣の小学校、中学校との感染状況の情報共有、「新潟市

立学校園ガイドライン」に基づく感染症対策を紹介しました。生徒には、マスク越しでのコミュニケーションの難しさや物事に取り組む意欲の低下等が懸念されるが、困難を乗り越えようという家族の絆、新たな生活を創造する力を身につけようとする意欲の高まりも見られ、この状況に応じた支援、地域との連携を語りました。

丸山氏は、新潟市の取組について、学校園の負担を軽減すること、研究のあり方を考えること、地域との連携を図ること、パンデミックに備えること、効率と効果を検証することの5つの視点から説明しました。今井氏は、全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙の結果をもとにして、教職員が学校現場で創意工夫ある教育活動に取り組んでいること、これからの教育で大切にしたいことを説明しました。

シンポジウムの協議を受けて、5つのグループ「学校現場の教師が考える『これから』」(学習指導)、「学校現場の教師が考える『これから』」(生徒指導)、「学校管理職が考える『これから』」、「シンポジウムを鳥瞰する『これから』」に分かれました。参加者は、これからの社会の担い手を育成する学校の教職員と児童生徒の姿を描き、自己の課題を確認しながら、活発に意見を交流しました。



リモートでのシンポジウム



牛腸昌克 1年次現職 在籍校新潟市立上所小学校

フォーラム第2部では12のラウンドテーブルを設定し、研究紹介・話題提供をさせていただきました。今回から院生主体で運営を進め、開催に向けての準備やラウンドテーブルの持ち方の協議を行いました。

ラウンドテーブル開催の趣旨は、自分の研究について参加者から批正を得ることを通して、研究の目的・方法・進捗を明確にし、今後の見通しを考える機会とすること、運営の主体となることで院生の連帯を高めること、そしてラウンドテーブルを研修としてデザインすることと考えました。

ラウンドテーブルは主に2年次の院生の話題提供でしたが、1年次の学部卒院生によるテーブルもありました。年次も校種も様々であり、教科研究から学校運営まで幅広く、教職大学院の魅力の一つである「多様性」を感じました。3つのテーブルは修了生から設定していただきました。GIGAスクール構想の現場での推進のあり方、特別支

援教育の実践といった今日的な教育課題について話題提供していただきました。修了生が自分の研究を現場に還元し、社会に開く姿は院生のロールモデルであり、大学院で学ぶ意義を改めて見いだすことができました。

今後、ラウンドテーブルの運営のあり方について、院生間でも今回明らかになってきた疑問や課題をもとに検討していきたいと考えています。今回のラウンドテーブルから、研究を発信する・研究への批正を得る・研究をもとに現場と実践の共有を図る・・・など、参加者との研修を自分の目的に応じてデザインすることができる可能性を感じました。ラウンドテーブルに臨む院生の目的を明らかにし、参加者のニーズを探りつつ、院生主体の運営を充実させていきたいと思っています。そして課題研究・フォーラムなどについて、大学院のカリキュラムでの位置付けや意味付けを考え、現場と研究の往還を図りながら、2年間の研究生活をデザインしていきたいと思っています。



長澤 正樹

身につけるドライブレコーダーアプリの開発

現在取り組んでいる研究は、AB-ANGELS(Applied Behavior Analysis Need Gentle Education and Learning System)、問題行動観察支援ツールと指導計画作成システムの開発です。AB-ANGELSとは、スマートフォンを使い特定の行動の生起前と生起後を記録し、Web上で関係者が協働して問題解決・指導計画を作成するWebアプリです。

例えばこういうことが可能になります。授業中教師がこのアプリをインストールしたスマホを教卓に置きます。授業中トラブルが発生したときにスイッチ(アップルウォッチなど)を押します。すると問題発生時の20秒前と20秒後(時間は変えられます)の動画がWeb上に作成されます。許可された人(教師、保護者、専門家など)がその様子を見て今後の指導について意見を交わします。問題が起き

る前の子どもの様子や教師の指示、問題が起きた後の教師の対応や子どもの反応など、しっかり確認できるのです。意見を集約すれば、個別の指導計画の完成です。支援会議を開かなくても、ある程度の計画作成と共同しての指導ができるようになります。

このアプリは、長岡技術科学大学永森先生、民間企業(ロレムイプサム)薄田社長と共同開発ですが、民間の療育教室や知的障害の特別支援学校の協力をいただいております。それぞれの臨床実験で、その効果が確認されています(AERA 2021年5月号参照)。今後は病院や高齢者施設での臨床実験を経て、このアプリを必要としている多くの方々に無償で提供できることをめざしています。

活躍する修了生



新潟市立上山中学校 関谷卓也

「目と手の成長」

呪術廻戦という漫画で、「目」より先に「手」が超えることはない」と言うセリフがありました。良し悪しを見抜く目を養わなければ、作品を生み出す手の成長は望めないという意味です。この原稿を書くにあたり、自分を俯瞰して見ると、2年前よりも教師としての目も手も成長していることが実感できます。

まず、目についてです。学級担任として、また数学教師として、生徒がよく見えるようになってきました。生徒の特性について見えるようになったのは、特別支援教育についての学び直しの成果です。そして、数学授業における生徒の分かり方、問いのもち方についてレンズをもって、教師の働きかけと生徒の活動を見ることができるようになっています。

また、転勤したばかりの学校ではありますが、学校運営の様々な動きについても見えるようになりました。特色のある学校づくりについて、地域連携について、安全管理について、授業デザインについてなどです。今までは過去の勤務校との対比でしか見えませんでした。しかし、今は理論や理想の姿とつながらながら見えるようになってきました。

手の方も成長を感じています。2年間の研究の成果である、数学授業において「既習と本習を構造化してまとめること」が、できる授業が増えてきました。また、特別支援の授業で紹介していただいた行動支援計画用紙は、自分で使ったり、同僚に紹介したりして活用しています。

大学院での学びを人生に生かすこと、学び続けることが実践できています。これからも成長をし続けます。

別の話題ですが、同期の活躍の様子を聞くのも楽しいことです。丸山哲也さんは、附属長岡小で頑張っています。長谷川拓海さんは白山小で、図書館の蔵書検索システムを開発して新潟日報に大々的に取り上げられました。平野俊郎さんは、浜浦小学校で弁当を食べているところがTVに流れました。きっと、他の皆さんも活躍していることでしょう。私たちの2年間はコロナ直撃で、直接会う機会が限られていました。今年こそは、夏にBBQと思っていましたが、やっぱり叶いませんでした。来年こそは実現したいものです。仲間との繋がりも、さらに深めていきます。



キャンパスに声が響いてきました。会話が有り、笑顔が有り。人と触れ合うことの喜びや大切さを再認識しているこの頃です。その中に、新しい変化もあります。時代のターニングポイントの中で生活しているのだと思います。

今年度もレイアウト・デザインを委託先の(株)Shitamichi HDに勤務する本学大学院修了生 川口おかりさんがご担当くださいました。(文責 酒井悟)

新潟大学教職大学院 News Letter「協創」 第12号 2021.12.1 発行 編集・発行 新潟大学大学院教育実践学研究所(教職大学院)広報委員会
〒950-2181 新潟県新潟市西区五十嵐二の町8050 問い合わせ先・kyousyokudaigakuin@ed.niigata-u.ac.jp
ホームページ URL:https://www.ed.niigata-u.ac.jp/kyousyoku/ ニュースレター、各種案内等はHPに随時掲載しています。



https://www.ed.niigata-u.ac.jp/kyousyoku/